白木神社本殿　附 宮殿

【所　在　地】伊佐市白木 813
【種　　別】県指定有形文化財（建造物）
【指定年月日】昭和 28 年９月７日

大口市羽月の麓から西へ約２ km，白木地区のほぼ中央，白木川右岸の微高地に，高く茂る樹々に囲まれて，茅葺きの建物がある。これが白木神社である。建物は間口３間（約 6.06m），奥行３間（約 6.06m）で，内部は板敷，中央に方１間（7.42・）の内陣を備え，内陣後の柱（来迎柱）を後方へずらした一間四面堂である。周囲には幅 1.9m の庇をめぐらしている。屋根は寄棟造で，正面に瓦ぶきの向拝をつけている。棟は現在東西についているが，元来は宝殿造りだったと思われる。現存の棟札等によると，この建物は応永 15（1408）年，白木山長福寺の観音堂として建てられ，永禄７（1564）年，寛延２（1749）年，天保 15（1844）年の３回修理されているため後補の部分が多いが，木鼻の彫刻，肘木曲線やその簡素なところに，中世建築の風格をよく残す貴重な建造物である。

〈参考〉

●中世の大口　大口地方は，中世「牛屎院」とよばれ，太秦姓の牛屎氏が勢力を張っていた。羽月には牛屎氏の支族羽月氏がいたが，室町時代，大隅の菱刈氏，肥後相良氏等が勢力を拡大しやがて島津貴久が進攻するに及んでその勢力下に組みこまれた。

●一間四面堂　中央に方１間（間は柱と柱の間を示し，正面一間，側一間を意味する）の身舎があり，その周囲を一間の庇で囲んだ堂をいう。つまり正面３間，側面３間である。